

ドイツ法の周辺で――再統一をめぐる人々のこと――

専門とする法分野についてドイツ法を研究対象の一部としてきたこととは別に、数年来ドイツ法とのもう一つの係わりが生じている。法科大学院において「ドイツ法Ⅰ」の授業を担当しているからである（Ⅰは私法・経済法、Ⅱは公法・刑事法を主に取り扱う）。しかし、通常の法律科目だけでも新たな授業方法等のために大いに負担となっていたから、プラスアルファとしてのドイツ法の授業に、十分な喜び、やりがいを感じられる状況になかったことを、遺憾ながら認めないわけにはいかない。しかし、十年一昔とでもいうのか大きな変化がみられ、ドイツ法の授業が面白い。受講生の反応も悪くない（と思う）。知的好奇心を刺激するテーマ設定にある程度成功したのかもしれない。考えられるトピックのうち、四半世紀前のベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一が20世紀後半のドイツの法と歴史をめぐる最大の出来事であることに、異論はなかり。筆者自身は、ベルリンの壁が崩壊した1989年11月の二か月前に当時の西ドイツにおける二年間の留学生生活を終え帰国していた。歴史的出来事を身近に体験できず残念であった反面、滞在中にドイツ民主共和国（東ドイツ）等東側諸国を実感できたことは、今となってはむしろ歴史的体験であった。ドイツ統一をめぐる動きは多面的であり、それを考察し検討する場合のテーマや切り口も際限がないほど多様である。読書や資料の購読を含む体験から、大いに興味を引かれた人々のことについて述べよう。

2002年初頭ユーロ導入時に三か月間足らずのドイツ滞在中であった筆者は、ベルリン・フリードリヒ・シュトラセ駅構内の小さな書店で、名前しか知らなかった19世紀後半の大家作家テオドール・フォンターネ（Theodor Fontane）の名著「Wanderungen durch die Mark Brandenburg」（マルク・ブランデンブルク周遊記）の一冊を手にとった。それが始まりだった。その後いくつかの偶然をとおして、フォンターネの研究者でもある現代作家ギンター＝ドゥ・ブロン（Günter de Bruyn）を知ることとなる。しばらくの間フォンターネ、ドゥ・ブロンを並行して読んでいたように思う。フォンターネも1871年のドイツ統一を経験した人物ではあるが、本稿における「統一」は、もちろん1989－90年のそれであり、（東）ベルリン出身のドゥ・ブロンが旅の最初の道連れとなる。まずは自己紹介をさせていただこう。

「愛の原因を明らかにしようとする試みはことごとく、解明できない部分が残るという認識で終わるだろう。これは、原因が愛されている客体のなかにだけ求められていること、しかし愛の原因は愛している側の衝動と欲求のなかにもあることから来るように思われる。愛している者はその衝動と欲求の存在をなかなか認めながらない。人は、愛される者の魅力が愛を生み出すものであると考え、自分の愛する気持ちこそが相手の魅力を魅力たらしめたものであることに眼を向けない。愛によって初めて、愛されるものはその愛に値するものとなる。風景への愛も、それがどのような風景かということだけから説明されるのではない。というのは、同じ風景であっても見る者の気分によっては異なったものに映るからだ。むしろしばしば、愛する者自身の側から説明することができる。ある地域の風景の魅力を受け入れる用意があつて初めて、その風景を他の地域の風景より高く評価し、他の人にとっては欠点に見えるものの中に逆に良さを見出すことができる。平地を好む人は、山によってそれが狭められないことを良いことだと思ふ。他方、山地の愛好者は、山がないことを空虚だと思ふ。海辺を好む者には、海辺に吹き荒れる嵐でさえも好ましいものとなる。」

印象的な引用文は2006年刊行ドゥ・ブロン「Abseits: Liebeserklärung an eine Landschaft」の冒頭である。書名の日本語訳を示さなければならないが、簡単ではない。後半の、いわば副題は「ある風景への愛の告白」ということになろう。主題のAbseitsは「隠遁」に近い意味合いである。これよりも少し軽いニュアンスの日本語はないものか。最善の日本語訳はともかく、この書名は作品についてだけでなく、著者についても多くを語ってくれる。

1926年ベルリン生まれの氏は、第二次世界大戦従軍後に帰還し、図書館司書として勤務した後1961年から今日まで著述に専念している。氏は東ドイツ成立から東西ドイツ統一まで東ドイツ国民として生きた。書名は、当局の検閲等によって自由な作家活動が阻害されることも多く、氏がベルリン郊外の辺鄙な村に「隠遁」したことによる。作品で、その地方の風景、風土、歴史、人物等が優しい絵のように描写される。もともと、20世紀後半を含むドイツの「風景」であるから、東からなだれ込む赤軍と首都を守る独軍の間の凄惨な戦闘と無関

係で済むはずもない。いずれにせよこの本から、彼の居住地についての情報が得られる。

ドゥ・プロインのことを知って以来、多くの著作を読み、惹きつけられてきた。単著だけでも約 40 冊を数え、テーマは多岐にわたる。そのうち、たとえば浅田次郎の著作における「蒼穹の昴」等中国史シリーズのように圧倒的存在感を示しているのは、ナポレオン戦争時代プロイセンの作家と周辺の文化人群像を絹のタッチで描いた大著「Als Poesie gut: Schicksale aus Berlins Kunstpoche 1786 bis 1807」（詩ならばよかろう：1786年－1807年ベルリンにおける芸術の担い手とその運命）、その続編「Die Zeit der schweren Not: Schicksale aus dem Kulturleben Berlins 1807 bis 1815」（重い苦難の時：1807年－1815年ベルリンの文化の担い手とその運命）であろう。ともに数十年の蓄積に基づく渾身の作品である。他方で、これらの優れて文芸的な作品群とは別に、複数の自伝的作品、「Zwischenbilanz」（中間報告）、「Vierzig Jahre」（40年）があり、広く読まれている。取り上げた彼の著作はすべて統一後に刊行されたものであり、東ドイツ独裁政権下でも自由人として筋を曲げなかった生き方が、統一後とりわけ尊敬を集めている。授与された文学賞等は 20 件に達する。

たまたま数年前ベルリンに数日間滞在する機会があり、翌日帰国という日の午後の半日自由時間が転がり込む。ドゥ・プロイン氏が長く住まいを構え、東ドイツ体制崩壊後も「隠遁」している郊外の村へ出かけるため、ホテルを出た。地図を手許において「Abseits」を熟読していたから目的地（Görsdorf bei Beeskow）、鉄道路線は頭に入っている。最後の乗換駅（Königs Wusterhausen）で、世界都市ベルリンの近郊とはとても思えない超ローカル線に乗り、田園風景を楽しみながら、降車すべき駅はもうすぐのはずだと少し緊張し始めていた。列車が地図に名前のない無人駅に停車した。いま乗車してきた男性が筆者の目の前に立ち、車内改札機を使っていた。こちらは座っていて、彼の顔は見えない。何気なく見上げると、本のカバーの折り返し部分の著者近影で見慣れた顔がそこにあった。瞬間的に決然とした気持ちになった。「お席にご一緒にいいでしょうか。私は日本の法学の教授で、エグチと申します。あなたのご本のファンになり、今日はたまたまお住まいの村を見て帰ろうと出かけてきました。」「何ということでしょう。驚くべき出会いですね。」「もちろん村へは行かず、このまま列車でしばらく一緒にしたいと思います。構いませんか。」「ええ結構ですよ、喜んで。自分の本の朗読会があって、終点のオーダー河畔のフランクフルトへ出かけるところです。ところで、法学の教授であるあなたがどうして私の書いたものに興味をもたれるのですか。」「子供のころからドイツの歴史や地理に興味がありまして。」——列車とフランクフルトのカフェで幸福な二時間余りを過ごし、夕食の約束をしていたベルリンの都心へ戻って、翌朝そそくさと日本へと旅立った。

「愛の原因」に係る一節は、自由の制限された東ドイツ旧体制下で人々が何を頼りに生きたかを示しているように思われ、あえて長く引用した。そのため、当初予定していたトピックの一部を見送らざるをえない。それは「ベルリンの壁を崩壊させた三人の男達」とでもいうべきテーマであり、具体的には、ギュンター・シャボウスキ（Günter Schabowski）、ハラルト・イエーガー（Harald Jäger）、ゲアハルト・ラウター（Gerhard Lauter）という東ドイツの体制側に身を置き、しかしそれぞれ異なる仕方では崩壊の引き金を引いた三人の人物のことである。もちろん、東の体制崩壊とドイツの再統一が多くの有名無名の人々や多様な諸要因によってもたらされたことは疑いない。「英雄都市」ライブツィヒ市民、ハンガリー政府、ドレスデン市民、ゴルバチョフ、東ドイツの驚異的債務超過、等々。このことを踏まえてもなお、シャボウスキ、イエーガー、ラウターの三人は特筆に値しよう。そう遠くないうちに、小文の続編として話題提供する機会があれば幸いである。

最後に、この楽しい仕事のきっかけになった「Law Books」のために付け加えれば、ドイツ近代私法の大家サヴィニー（Friedrich Karl von Savigny）は、ロマン派文学者と密接な交流があり、苦難の時にベルリンの文化を担った人物として前述「Die Zeit der schweren Not」に登場する。こうしてドイツ法の周辺と中心が出会う。